

## 天理教教義翻訳の諸相 ④

## 昭和期（戦前）の教義翻訳

昭和2（1927）年11月27日、新たに海外伝道規定が制定され、天理教教庁海外伝道部（中山為信部長）が設置されると、天理教の海外伝道は教会本部による組織的な動きとして展開されるようになった。昭和3（1928）年1月には、翻訳業務を管轄する第一課（山澤為次課長）が主導し、天理外国語学校内に教義翻訳研究会が設けられた（山澤，1935:136）。その後、昭和5（1930）年から6（1931）年にかけて、山澤課長が著者、松井忠義、中西喜代造、七里音羽、川内忠次らが翻訳会委員となり、天理外語各語部主任が翻訳を担当して『天理教教義大要』が英語、北京語、ロシア語、マレー語、朝鮮語、スペイン語で発刊された（『天理時報』，昭和6年5月21日号）。さらに『天理教教祖伝』（奥谷文智著）と『天理教教話』（松井忠義著）も英語、北京語、ロシア語、マレー語、朝鮮語、スペイン語、広東語で出版され、海外伝道部から各地に送付された（山澤，1935:136）。

他方、天理図書館では昭和4（1929）年頃から、グリーン、バレー、ハースら外国人研究者による天理教文献の邦訳が開始され、三部作の参考資料として出版された。また昭和7（1932）年には、英独仏『外字新聞天理教』が創刊された。第一面には三カ国語共通で天理教に関するニュースが掲載されたので、創刊当初から教義語の適正な翻訳研究を行う「訳語会」を中心に教義語統一の努力が重ねられた。

『天理教教義大要』等の出版に翻訳会委員として関わっていた中西喜代造は、以前紹介した増野道興著、小泉卓蔵訳『英文天理教』（TENRIKYO, Tambaichi: Doyusha, Tenrikyo Head Church, 1924.）の出版以来、大正から昭和にかけて教義翻訳において重要な役割を担った人物の一人である。中西は天理中学校卒業後、大阪府立図書館に勤め、大正11（1922）年から天理教校職員となり、大正14（1925）年2月からは天理外国語学校及び天理図書館職員となった。小泉は天理中学校、天理外国語学校で教鞭をとった後、奈良女子高等師範学校教授となった。天理中学校時代、小泉は中西の担任で、両者は師弟関係にあった。『英文天理教』出版に際し、小泉との連絡や出版業務、本文の校正などは全て中西が担当していた（中西，1924:54-55）。

中西は多くの論考を残したが、なかでも昭和6（1931）年6月1日号の『天理時報』から連載された「外国文献に現れた天理教」では健筆をふるい、グリーンの『天理教』を自ら邦訳し、詳細に分析した。

まず邦訳の動機として「外国文献に現はれたる天理教は外国人の眼に映じたる、又は紹介せられたる天理教のプロファイルである」とし、「これが提出する各種の問題を慎重に検討する時期に際會してゐる」と天理教が外国人にどのように理解されていたかを知ることが、伝道上、非常に重要であるとした（中西，24:1936）。またグリーンの英訳「みかぐらうた」に関し次のように論じている。

まずグリーンが第一節の「てんりわうのみこと」を August Kings of the Heavenly Principles と英訳している点に関して、中西は「天理の理を Principles と譯することは問題で、これは天理教の宇宙説に於て天理王の命を Their Augustness of the Heavenly Reason と云ふ言葉を使っていますが、茲ではむしろそれを生かして August King of the Heavenly Reason とした方がよいと思ひます。然し吾が天理教では天理王の命さまを親神様と申し上げてゐますので、両親則ち Parent なる文字を使って Parent of Heav-

enly Reason と譯せば更に完全なものであると思ひます。」（中西，102:1936）と述べている。教義語の中でも「理」は多義語として翻訳が非常に困難な語彙の一つであり、過去の訳例を見ても多くの変遷がみられる。

また第三節の「かんろだい」をグリーンは the Mound of the Sweet Dew（甘露の丘）と訳している点について、「この Mound といふ言葉には『土又は石を以て小高くなれる處』といふ意味がありますから現在の仮神殿が撤廃せられて四方正面から禮拜するという将来を餘想してこの Mound なる言葉を使用されたとすれば、この譯は餘程深く考慮されたものと思ふのです。念のために英文天理教の譯者小泉卓蔵教授は甘露臺のことを Holy Stand for Dew of Life 即ち『生命の露の聖なる臺』と譯され岩井尊人氏は Nectar Vessel 即ち『神酒の杯』と譯してみられますが共に研究に値するものだと思います。」（中西，102:1936）と述べている。

訳語からは、明治15（1882）年の石のかんろだい没収後、一尺ほど小石が積まれていた状況も想起されるが、グリーンがおぢばを訪れたのは明治27（1894）年で、板張りの台が二重に置かれた当時の様子を実際に確認していた。その上で the Mound と翻訳している点は興味深い。いずれにしても小泉、岩井の訳語と比較すると「かんろだい」の訳語だけを見ても、教義語翻訳がいかに困難であるかが理解できよう。上述の通り、訳者の解釈如何で全く異なった訳語になってしまう。

実際に翻訳に取り組むと、その過程で教理の変容という現実を直視せざるを得ない場面に度々遭遇する。翻訳の過程では、訳者の原文解釈による変容と、読者の訳文解釈による変容と、大きく二段階の変容を経る可能性がある。中西は特に訳者の原文解釈について「教義の再吟味」という表現で次のように論じている。

吾が天理教の教義の中にも民族的乃至國家的色彩の可也濃厚な處がないでもない。またあるのが當然である。要はその教義の根底をなしてゐる世界的教義を如何に表現し強調するかにある。教義の一字一句を動きのとれぬ絶対的なものとして認容する人々は斯る傾向を信仰の墮落乃至異安心として退けるかも知れぬが、それは決して墮落でも反抗でもなくむしろ跳躍であり一步の進歩である。海外傳道へ男々しくもその一步を踏み出さんとする吾々はこの意味に於いて今や教義の再吟味をなすべき時期に直面している。教義の再吟味とは、教義を御都合主義に改変乃至修飾することではなくて、その在るが儘の本然の姿に還元することに依りて現代に生かすことである。（中西，23:1936）

翻訳は常に原文に立ち返るまなざしを内包している。「在るが儘の本然の姿に還元することに依りて現代に生かす」と中西が論じたように、翻訳者は、原文にいかにか忠実であるかという視点と、読者が訳文をどう理解するのかを予測しつつ、通時的共時的隔たりをいかに克服しうるかという視点を併せ持ち、原文と訳文の間を絶えず行き来する。中西が言う「教義の再吟味」とは、翻訳者にとってはまさに「求道」の態度そのものであり、永遠の課題であるように感じる。

## [引用文献]

- ・中西喜代造『中西喜代造集 前編』本島史料集成部、1936年。
- ・中西喜代造「TENRIKYO」出版の前後』『道の友』、1924年10月号、pp.53-61。
- ・山澤為次『開校十年誌（一）』天理外国語学校、1935年。